ノーベル賞も「外圧」？

ＥＵが憂慮する連月の執行

死刑について考えてみませんか

東京拘置所のそばで死刑について考える会（そばの会）

滝実前法務大臣は、退任直前の９月27日に２名の死刑を執行していきました。これで、今年になってからの執行は３回目で、計７人になります。しかも、８月３日の執行から２ヵ月と経っていません。自民党政権時代末期に「死神」とも揶揄された鳩山邦夫元法相でも２ヵ月連続での執行を命じたことはありませんでした。

いまや、法律で執行はしないと定められている休日以外、いつ、何回、執行があってもおかしくないような緊張のもとに、死刑囚も、刑務官もおかれています。

★☆★

今回ノーベル平和賞を受賞した欧州連合＝ＥＵも、こうした日本の死刑の状況に遺憾の意を表明しています。ＥＵ加盟国は死刑を廃止することが義務づけられており、死刑を残す国々への働きかけを強めています。

そうした声に「外圧だ」「内政干渉だ」と反発する人も少なくありませんが、日本人がノーベル医学賞を受賞すれば国際社会から評価されたとマスコミをあげて大歓迎しているのですから、ＥＵからの批判も虚心に受け止めてはどうでしょうか。

少なくとも、国際世論のどこからも日本の死刑執行を望むような声は伝わってきません。そして、今、死刑執行を強行しているような国々は、なぜ自国では死刑が必要なのかの弁明に苦慮しています。日本の場合、殺人事件などの凶悪犯罪はむしろ減少傾向にあるのですからなおさらです。

★☆★

ＥＵ諸国もはじめから死刑がなかったわけではありません。親の世代であれば死刑が当たり前のようにあった社会に生きていた人も少なくないでしょう。

韓国では元死刑囚である金大中氏が大統領に就任し死刑の執行が停止されてから10年以上が経ち、現在では死刑の執行はないのが当たり前、という世代が育ちつつあるそうです。

日本でも死刑を廃止することが、新しい人権感覚を持った世代が育つ第一歩になればと願います。